



## 出雲にて

沖田行司

出雲路を旅した。ひとり旅というようなものではない。道連れは血気盛りの若人十三名である。ともに日本教育史を学ぶ三回生である。生きた教育の歴史を学ぶには、人々が学び、生活した場所を実際に歩いてみる必要がある。こうした一応の理由をつけては一年に数回学生達と旅することにしていく。教師と学生とのこのような「行事」の歴史は、近世の大儒である荻生徂徠（一六六一—一七二八）が率いた個性豊かな私塾護園の花見までさかのぼることができる。また、近世の庶民教育の機関である寺子屋でも、そうした行事がおこなわれていたようである。尤も、これらは今日流に言えば、相互の親睦を目的とするコンパに相当する。明治十年ぐらいまでは、初詣や登山、船遊びという名称でそうした教育行事がおこなわれていた。このような娯楽を中心としたものから、兵式操練を擬した行軍をとり入れた「遠足」が登場してくるのが、教育の国家管理が強まる明治十七年頃である。初代文部大臣森有礼は、休暇中の学生・生徒の把握および生活指導をかねた登山や温泉などを奨励している。

旅行と学習が結びつけられた「修学旅行」

が教育用語となるのは明治二十一年八月に定められた「尋常師範学校設備準則」においてである。当時の「修学旅行」の目的はといえば「生徒ノ見聞ヲ博ムルノ利益、生徒ヲシテ世態ニ通セシメ、人生ノ苦楽ヲ実験セシムルノ利益、教員ト生徒トノ間ニ親愛ノ情ヲ通ズルノ利益」（『大日本教育会雑誌』第五十七号 明治二十年六月）というような利点から考えられている。ともあれ、私達の旅はこうした崇高な教育理念にもとづいたものではない。むしろ、私にとっては、こうした機会に若い人々の純粹で新鮮な発想から学び、啓発されることの方が多いのである。

松江を中心とした出雲を歩こうと決めたのは学生諸君である。商業ベースののっかってファッション雑誌から抜け出たような若者がたむろして出かけるような所は避けたいというのが私のただ一つの希望であった。予め発見すべき事柄がレディーメイドされているような所では、生々しい歴史的想像力をたくましくできないからである。しかし、近年は郷土の歴史に対する関心が高まり、地方史研究の発達によって、全国津津浦浦にいたるまで歴史文化の掘りおこしがなされつつある。

さて、松江までは山陰本線の特急を利用すると大阪から六時間、新幹線で岡山まで出て伯備線の特急に乗り継ぐと四時間ばかりである。しかし、賢明な学生諸君は、車中での一時間の対話を求めて特急を避け、急行「だいせん一号」を選んだ。午前九時五十分到大阪をたつて、松江に着いたのが午後四時五十分であった。七時間といえば、大阪からハワイまでの飛行時間である。神々の国への旅は容易ではない。

松江市の南方に「八雲立つ風土記の丘」と呼ばれる丘陵地がある。この辺り一帯は古墳時代から平安時代を通して、出雲地方の政治



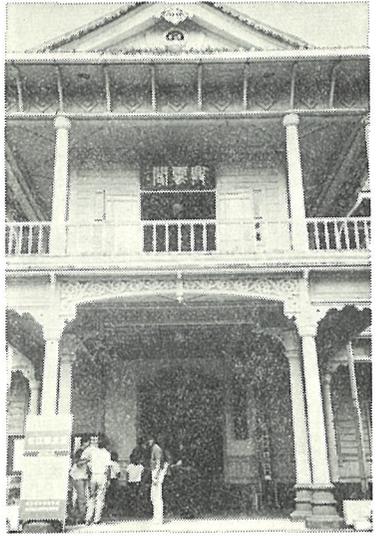
松江城天守閣

経済・文化の中心であったといわれている。ここには、「額田部臣」の銘文のある大刀が出土した岡田山古墳をはじめ、多くの古墳が群をなしている。これらの古墳から出土したものは風土記の丘資料館に展示されている。古墳の他にも、風土記の丘には出雲国庁跡や出雲国分寺跡なども保存されている。国引きの神話など、出雲地方の伝承や地誌を編纂した『出雲国風土記』も、恐らくこの辺りのどこかで書かれたことであろう。風土記というのは周知の通り、『古事記』の完成後、撰進の令により、諸国でつくられた地誌である。現存しているのは五風土記であり、その中で完本として今に伝えられているのはこの『出雲国風土記』のみである。『出雲国風土記』の中でも、私達の興味をそそるのは、島根半島の形成にまつわる壮大な国引きの神話である。これによれば、日本海をへだてた新羅の国(朝鮮半島)と北陸の都都の崎(能登半島)から、八東水臣津野命という神が余っている国を引き寄せて島根半島をつくったというのである。そうして、この時、引き寄せてきた国が流出しないように、これを繋ぎとめるために打ち立てた杭の一つが火神岳(現在の大

山)だといわれている。国引きの神話に登場する朝鮮半島や北陸の地名と、風土記の丘一帯の古墳から出土する出土品の豊富さから、古代における日本海文化圏といったものが想起されよう。八雲立つ出雲とは、『古事記』に「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」とあり、また『出雲国風土記』には「出雲となずくるゆえは、八東水臣津野命のりたまいき。八雲立つ出雲とのりたまいき」とある。実に、神々の国にふさわしい形容である。

明治三年十二月に制定された松江藩校修道館の学則表には、最上級年の科目に『出雲国風土記』があげられている。文化そのものが中央志向を強め、全国画一化の傾向を迎るのは、ある意味においては近代化の宿命でもある。しかし、その地方の祖先がつくりあげた神話なり伝承が、今日に生きる人々にどのように伝えられているかということは興味のある問題である。

予約しておいた宿泊所は、ホテルでも旅館でもなく、出雲の旅にふさわしい「宿屋」であった。駅前の繁華街を通り抜けて、少しばかり裏路にはいったところの宿屋は、私達で



興雲閣（松江郷土館）

ある。如泥というのは、酒を愛し、しばしば泥酔状態に陥ったところから与えられた号ともいわれている。旅から帰ってから、筑摩書房から出版された『江戸時代図誌』の中に如泥の作品を見つけることができた。

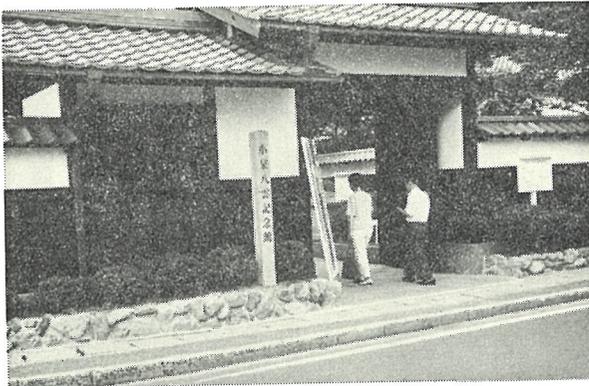
先程の御輿は歳徳神宮御輿とい、写真でみても非常に重厚な感じのする作品である。この御輿の細工の詳細については、い

まだに解明できないという宿屋の主人の話を思い出し、納得したしだいである。

ほぼ満員になった。この宿屋の玄関に面したところに、将棋の会所の看板がかかった民家がかった。この入口に一メートルに足りない石柱が立っているのを見つけた。ただ「小林如泥居住跡」と刻まれていた。宿屋の主人の説明によると、如泥は指物・彫刻にすぐれた大工で、地元の御輿を作った人物ということであった。松江を歩いている間に、色々調べたところ、如泥は宝暦から文化年間にかけて生存した人物で、七代藩主松平治郷の御教寄屋大工として仕えている。寛政九（一七九七）年には剃髪しているが、奥納戸御好御用掛として仕え、数々の作品を残したということだ

宍道湖の蜷の味噌汁に舌鼓を打った翌日、宿から宍道湖大橋を渡り、旧松江城跡を歩いた。現在は天守閣と石垣のみを残しており、あたり一帯は城山公園と呼ばれている。二の丸跡に興雲閣という白亜の洋風木造建築がある。これは明治三十六（一九〇三）年に、明治天皇の巡幸を願望し、行在所として建てられたものである。当時の金額で一三、四八九円の建築費が投じられている。県の文化財の指定を受けているこの建物は、現在は松江郷土館として、郷土の教育・文化・民俗・経済

に関する資料の保管や展示に利用されている。教育の室と名付けられた一室には、松江の吉田松陰と称された沢野修輔（一八二八—一九〇三）の関係資料をはじめ、明治・大正・昭和の松江の教育の歴史を語る多くの資料が展示されている。ちなみに、沢野が開いた私



小泉八雲記念館

塾「培塾」からは若槻礼次郎や日本の体育振興に貢績のあった岸清一などが出ている。また、文明開化の室では、松江の近代化に関連した資料がみられた。山陰の一地方都市の郷土館を通して、日本の近代化を支えたのは一体何であったのかという問題の一つの解答をみた気がした。

興雲閣を出て、桃山初期の城郭美を残している五層六階の天守閣にのぼった。宍道湖を背景に立ち並ぶ市街地を展望してみると、かつて小泉八雲が「地上における神の国」と形容した神秘さは、遠い昔のことのように思えた。しかし、ここには、壮大な神話を創造した出雲族の子孫が、今なお着実に松江の歴史を築きあげている現実がある。

小泉八雲 (Cafcardio Hearn) が松江中学校の英語講師としてこの地を訪れたのは明治二十三年(一八九〇)年のことである。松江中学校の辞令にヘルンと記されて以来、松江ではヘルンと呼ばれている。小泉八雲と名のるのは、旧松江藩士の娘である小泉節子と結婚した後、明治二十九(一八九六)年に帰化願いが許されたからである。八雲が松江に住居を置いたのは、わずかに一年と三ヵ月である。

山陰の冬の厳しさに耐えられなかったからだともいわれている。小泉八雲記念館には七〇〇点にもほる資料が展示されている。

旅の終りに出雲大社に参詣した。もはや縁結の願いなど無用になった私とは異なり、若い諸君には、はじめて出雲の神々の存在が身近に感じとれたことであろう。

(大学文学部助教授)

## 新島講座・講演内容公刊について

### ○「THE LIBERAL ARTS TODAY」

アーモスト大学副学長  
プロッサー・ギフォード博士(第二回講座)  
頒価七〇〇円

### ○「STREAMS OF GRACE」

——STUDIES OF JONATHAN EDWARDS,  
SAMUEL TAYLOR COLERIDGE AND  
WILLIAM JAMES——  
ハーバード大学教授  
リチャード・ラインホルド・ニーバー博士(第二回講座)

頒価一、三〇〇円

### ○「THE PROFESSIONALIZATION OF SCIENCE」

——FRANCE 1770-1830 COMPARED TO THE  
UNITED STATES. 1910-1970  
プリンストン大学教授  
チャールズ・クルストン・ギリスピー博士(第三回講座)

頒価七〇〇円

### ○「環境と法律」

——ハーヴァード・ロー・スクールで教えて——  
元同志社大学法学部教授・現東京大学法学部教授、  
藤倉皓一郎(第一回東京講座)

○「時間と人間の経済活動」

同志社大学経済学部教授、榊原胖夫(第一回東京講座)

○「白砂を訪ね」  
——鳴き砂の秘密——  
同志社大学工学部教授、三輪茂雄(第二回東京講座)

各冊子とも頒価五〇〇円

発行者・学校法人同志社 取扱い・同志社収益事業課